

アフリカは破綻する

谷口裕亮（松山大学経済学部）

今世紀に入り、アフリカ経済の復活が盛んに報道されるようになった。アフリカは1990年代半ばまでの長い経済停滞からようやく抜けだし、近年では（2009年を除いて）5%前後の実質成長を続けている。その原因として、石油をはじめとする天然資源に対する世界的な需要が拡大し、その国際価格が上昇したこと、アフリカ諸国の統治水準が良くなり経済政策や制度などが改善されたこと、携帯電話をはじめとする技術が人びとの間に広がってきたことなどがあげられている。

しかし、このアフリカ経済の急成長は果たして本物なのだろうか？ 多くの研究は、紛争や気候変動などの不安定要因を抱えているものの、まずは大丈夫だろうとの見方を示している。しかし私は、現在のこの成長を懐疑的に捉えている。日本のバブル崩壊やアジアの通貨金融危機、アメリカ発の金融危機ほど規模は大きくはないが、アフリカは今、何らかの経済危機に向かっていると考えている。世界を自由に行き来する資本は、アメリカを逃れ、ユーロ圏を離れ、最近では日本にも（様子をうかがうように）出入りしているようだが、アフリカにも向かっていた。アフリカに流れ込んでいる資本は、先進国にとっては大した規模ではないが、経済規模が元々小さいアフリカにとって巨大である。そしてそれが現在の急成長を演出している。しかし、それはアフリカの実体経済、ないし広い意味でのアフリカの経済発展の水準、資本を受け入れることのできる容量を上回っているのだ。

アフリカの危機が、いつ・どこから・どのような形で発生するのかについて、確かなことはまだ何も言えないが、危機に向かっていると考えられる兆候はすでに現れ始めている。例えば、最近ではアメリカによる“緩和マネー”の引き揚げによって南アフリカの通貨 rand が減価し、物価の上昇などによる混乱も懸念されている（2012年の成長率は2.5%）。近年のアフリカの成長について“this time is different”と考える人は多いかもしれないが、アフリカ経済の現況は“c'est déjà vu”と言うべきであろう。

この報告では、なぜアフリカ経済が危機に向かっているとと言えるのかを、比較的健全な経済成長を遂げてきた東南部アフリカの15ヶ国（エチオピア～南アフリカの非石油輸出国で、経済規模はアフリカ全体の約6割を占める）に注目し、いくつかのデータを用い、近年の主要な経済危機と比較しながら明らかにする。なお、東南部アフリカに注目するのは、この地域が近年のアフリカの経済成長を牽引しており、逆に、この地域、特に南アフリカのつまずきがアフリカ全体に伝播すると考えているからである。